

2014年度CGS イベント報告

第2回 R-Week 報告

堀真悟

ジェンダー研究センター 研究所助手/準研究員

2014年6月2日（月）～7日（土）、ジェンダー研究センター主催「第2回 R-Week」が実施された。R-Weekとは、ジェンダー・セクシュアリティを中心にキャンパスで学生が経験するさまざまな問題に対して、声をあげられる環境づくりを目指すプロジェクトである。

2013年に続く第2回は、イベントウィークを設定し、レクリエーションや講演会をおこなったほか、APIフェローでジェンダー研究センター研究員のシエコ・レト氏によるアート作品の展示「Trans & Dance: Trans*Issues Transcending Three Continents」と「R-Week関連書籍フェア」を図書館内で開催した。そこでは、第1回以上にイベントの内容・形式は多様化し充実したものになった一方、次年度以降の課題も浮き彫りになってきた。以下では、各日のイベント内容の報告を行うとともに、今後の課題を挙示していく。

まず、初日の2日（月）12:45-13:00には「レインボー・フラッシュモブ@ICU～学内の多様性に“Yes!”～」を、バカ山（本館前・屋外芝生エリア）にて行った。これは学内のLGBITサークル「Sumposion」からの持ち込み企画として実現したものだ。フラッシュモブとは、インターネットなどで呼びかけを受けた不特定多数の人が、公共の場に前触れなく集合しパフォーマンスを行うことである。約35名が参加した今回のフラッシュモブでは、昼休みで人通りの多いバカ山を使い、ジェンダー・セクシュアリティをはじめとする学内の多様性を表現し、かつそれを肯定するメッセージを発信した。

続く3日（火）13:50～15:00にCGSで行ったのは、レクリエーション「レインボーゼリーを作ってみよう!」である。やはりSumposion発の企画であるこのレクリエーションでは、6色のゼリーを作りつつ、ジェンダー・セクシュアリティについて気軽に話す機会を設け、約10名が参加した。

4日（水）15:00-17:00には、講演×アートセラピー「Trans*mission: Sharing Session & Art Therapy Workshop」を本館252号室にて開催した。こ

ここでは先述したシエコ・レト氏を講師として迎え、アジア3カ国のトランスジェンダーを取り巻く状況についてのレクチャーとアートセラピーワークショップを行い、約8名が参加した。氏は現在研究期間を終え帰国しているが、CGSでは今後も交流を深めていきたい。

5日(木) 12:50-15:00には、ワークショップ「依存症からの回復—アルコール依存・薬物依存・摂食障害をどう生き延びてきたか」を本館302号室にて開催した。講師は、ダルク女性ハウスの施設長で、自身もアルコール依存・薬物依存・摂食障害からの回復者である上岡陽江氏。依存と依存症が特定の人の問題ではなく、あらゆる人の生に関わる問題であることを踏まえ、当事者研究の見地から、自らの抱える問題を把握し他者に伝える方法を紹介する氏の語りには、30名の学生や教職員が耳を傾けた。本ワークショップは小規模で密にできるよう、予約制での開催としたが、定員30名の枠は募集開始からほとんど埋まったことから、このテーマへの関心の高さが伺える。

そして、最終日の6日(金) 12:50-15:00に本館367号室で行ったのは講演会「大学生活と『多様性』 —セクシュアル・マイノリティへの『寛容』から考える」である。講師は、中京大学国際教養学部教授で社会学を専門とする風間孝氏。セクシュアル・マイノリティへの「寛容」な態度が、差別的な相互行為秩序を再生産し、マジョリティとマイノリティ間の社会的資源の格差を温存することが明快に論じられ、約60名が参加する白熱した講演会となった。なお、この企画のきっかけは、「セクシュアリティの多様性が、寛容な態度で受容されることへの納得のいかなさ」という学生の声である。「いいじゃん、セクマイ!」「友だちにたくさんいるよ!」といった寛容さの問題点を明らかにすることは、「多様性」が守られるキャンパスとはどのような空間なのか、どうすればそれは作られるのかという、R-Weekにとって核心的な問いにもつながっていた。

以上が、第2回のR-Weekの概要と報告である。レクリエーションからワークショップ、講演会までその内容は充実しており、R-Weekが当初から目指していたように、学生のニーズを具体化して実現することもできた。また、ゲスト講師を迎えた三つのプログラムでは、今後のR-Weekでも継続して取り扱っていくべきテーマが示された。

反面、そうした重要なテーマをどのように学内に発信していくのかという点では、困難も浮き彫りになった。1、2 日目のレクリエーションの参加者はごく少数かつ、普段から CGS を利用しているか、Sumposion メンバーである場合がほとんどだったのだ。確かに、野外でのフラッシュモブや CGS への訪問自体が、参加を妨げる障壁となっている可能性は常にある。だが、その上で CGS と学生との連携不足があったことも否めない。

実際に学生からアイデアやニーズが出されたとき、R-Week はそれをどのように具体化することができるのか。その方法論の確立は、今後の課題である。これは、主体となる学生が年ごとに入学・卒業していく中で、R-Week を持続可能かつ発展性のあるプロジェクトにしていくためにも、取り組まれるべきだろう。

**AY2014 CGS Event Report
2nd Annual R-Week Report
Shingo HORI
Research Institute Assistant/Associate Research Fellow, CGS**

The second annual R-Week chaired by CGS was carried out from June 2nd (Mon) to the 7th (Sat), 2014. R-Week is a project in which we aim to create an environment where students can raise their voices about the problems they experience on campus, primarily related to gender and sexuality.

June 2nd (Mon): “Rainbow Flash Mob at ICU: Celebrate Diversity on Campus”

Place: Bakayama (grassy area in front of Honkan)

Participants: 35 (approx.)

The on-campus LGBT circle, “Sumposion,” gave the idea for this plan.

June 3rd (Tues): “Let’s Make Rainbow Jelly!”

Place: CGS

Participants: 10 (approx.)

This plan was also based on an idea from Sumposion.

June 4th (Wed): Lecture x Art Therapy, “Trans*mission: Sharing Session & Art Therapy Workshop”

Place: Honkan 252

Participants: 8 (approx.)

Here, we welcomed Shieko Reto as a lecturer to talk about the situation concerning transgender people in three different Asian countries, and to hold an art therapy workshop.

June 5th (Thurs): Workshop “Recovery from Dependence: How Did I Survive Alcoholism, Drug Addiction, and an Eating Disorder?”

Place: Honkan 302

Participants: 30

The lecturer, Harue Kamioka (facility director at DARC Women’s Halfway House), is a survivor of alcoholism, drug addiction, and an eating disorder.

June 6th (Fri): Lecture, “Campus Life and ‘Diversity’ — Regarding ‘Tolerance’ for Sexual Minorities”

Place: Honkan 367

Participants: 60 (approx.)

The lecturer, Takashi Kazama, is a professor at Chukyo University’s School of International Liberal Studies who specializes in sociology.

The contents of every event — whether recreation, a workshop, or a lecture — were meaningful, and we were able to materialize and fulfill student needs, which was the aim of R-Week from the outset.

On the other hand, the difficulty in how we should spread these important issues around campus was also made apparent. Furthermore, it is undeniable that there was a lack of cooperation between CGS and students.

How should R-Week materialize student ideas or needs when we are presented with them? Our task for the future is to establish a method for doing such. As students — the subjects of R-Week — enter the university and go on to graduate every year, this issue needs to be tackled in order to make R-Week a sustainable and evolvable project.